

[報 告]

## 九州共立大学におけるアスレティックトレーニングルーム 利用者記録の役割

井手 裕子<sup>1)</sup>, 藤井 均<sup>1)</sup>

### The role of record keeping in Kyushu Kyoritsu University Athletic Training Room

Yuko IDE<sup>1)</sup> and Hitoshi FUJII<sup>1)</sup>

#### 緒 言

日本におけるアスレティックトレーナー(AT)の役割は、スポーツの外傷予防、スポーツ現場における救急処置、アスレティックリハビリテーション、コンディショニング、測定と評価(関節可動域の測定や徒手筋力検査などの測定から導かれる機能評価)、健康管理と組織運営、教育的指導の7つであるとされている<sup>1)</sup>。これらの役割を果たす為、ATはスポーツの競技特性の知識、スポーツ科学の知識、およびスポーツ医学の知識が必要不可欠である。また、スポーツ競技関係者(例えば、監督、コーチ、選手の保護者、チームドクター等)と円滑なコミュニケーションを図ったり、信頼関係を築いたりする能力もATには求められている<sup>1)</sup>。

本学は日本体育協会公認アスレティックトレーナーの適応コース承認校であり、2008年に認定されAT教育に携わっている。適応コース承認校では、日本体育協会で実施されているスポーツ指導者養成講習会と同じカリキュラムを履修することが出来、講習や試験の一部が免除されるが、カリキュラムの一環として180時間の現場実習が課されている。そこで本学では、公認ATの管理および指導の下、本学スポーツ学部B館にあるATルームにおいて現場実習を行っている。具体的には、スポーツ学部B館の103および104教室を使用し、月～金曜日(水曜日を除く)の午後4時30分から午後7時30分まで実施されている。平成21年12月現在、ATを志す9名の学生が実習に参加しており、スポー

ツ学部所属の2名の有資格者(日本体育協会公認および全米アスレティックトレーナー協会公認)が指導を行っている。ATルームの利用対象者は本学における運動部に所属する学生であるため、大学生アスリートに対する健康面のサポートと競技力向上の為のアドバイスを主な業務としている。

これらに加え、先述したようにATの役割には組織運営と管理も含まれている。したがって、本学のATルームでの現場実習においては、ATルームを利用する大学生のコンディションおよび症状の記録と管理を実施することで、ATに課されている組織運営と管理<sup>1)</sup>の導入的教育を行っている。ATルーム利用大学生のコンディションおよび症状を記録・管理することで、トリートメントやリハビリテーションに対する大学生利用者の反応と変化を客観的に観察することが可能になると同時に、短期・中期・長期の各期にわたるゴールの設定が効率的に行えるようになる。これらはATにおける組織運営と管理の為に重要な事項であり<sup>2)</sup>、この意義を理解させることがAT教育において必要不可欠である。

そこで本報告では、AT教育の一環として実施されているATルーム利用大学生のコンディションおよび症状の記録の途中経過を公開し、この記録がAT教育において有する教育的意義、および記録の有効な活用方法について簡単に考察した。

1) 九州共立大学スポーツ学部

1) Kyushu Kyoritsu University Faculty of Sports Science

方 法

本報告では、2008年12月から2009年11月までの期間にATルームを利用した本学大学生の記録を集計して公開する。利用者数および外傷・傷害発生件数を、部位別、部活動別、および男女別に報告する。

1. 期間

本報告における利用者記録は、2008年12月1日から2009年11月30日までの期間を対象とした。

2. 対象者

本報告における利用者記録の対象者は、ATルームの開放時間に、相談・リハビリテーション・トリートメント等を受けた本学運動部に所属する大学生であった。

3. 記録内容

利用者記録には、ATルームに入室した日付、ATルームに入室した時間帯、氏名、性別、学籍番号、所属する運動部、外傷・障害を有する部位、ATが評価した結果、ATが施したトリートメント内容等を記入する欄を設けた (Fig.1)。

KKU ATR 入室記録		入室目的 傷害相談・応急処置・リハビリテーション・コンディショニング・トレーニング相談										
No.	年月日	種	学部	学籍番号	氏名	性別	競技	部位・ケツシツ	入室目的	部位	傷害名	トリートメント

Fig.1 Sign up sheet for athletic training room users

結 果

1. 利用者数

該当期間における利用者数は延べ2009名 (男子：975名，女子：1034名)であった。月別利用者数は3月が267名と一番多く，次いで6月の265名となった。3月から6月末にかけて多くの大学生がATルームを利用していた (Fig.2)。また，8，9月は本学の夏季休暇

の影響からか，利用者数が少なかった (Fig.2)。なお，該当期間において，平均10.43名/dayの選手がATルームを利用していた。

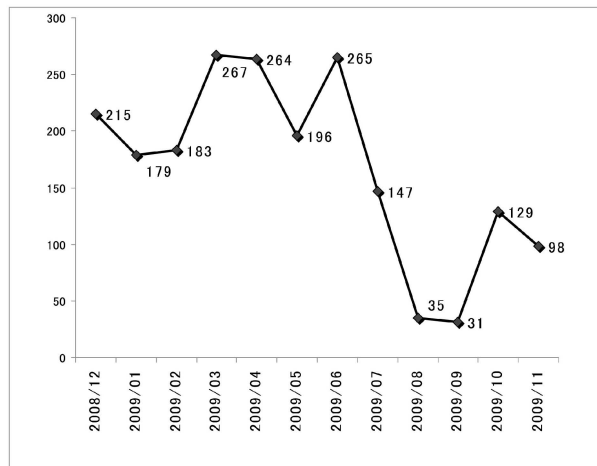


Fig.2 Monthly total number of users at athletic training room.

2. 部活動別利用者数

延べ2009名の利用者を部活動別に見てみると，男女陸上部，男女バスケットボール部，男女器械体操部に所属する選手たちの利用頻度が圧倒的に多く，延べ1490名に及んでいた。これは，利用者全体の約74%を占めていた (Fig.3)。

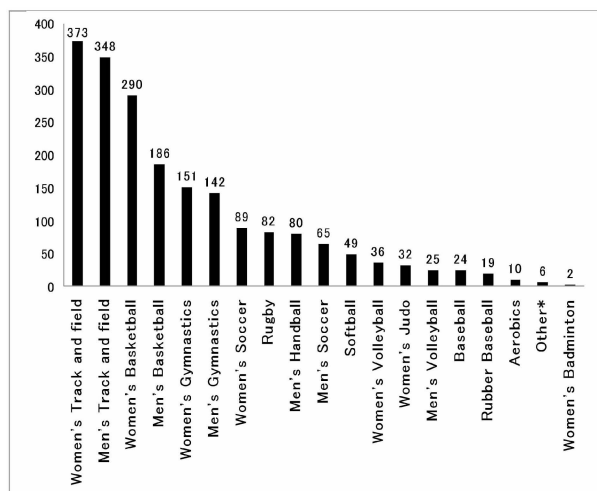


Fig.3 Total number of users at athletic training room by club team. \*Other: women's handball, judo and American football.

3. 部位別外傷・障害発生件数と内訳

ATルーム利用大学生の外傷・障害を部位別で見ると，膝関節の外傷数が最も多く (延べ588名)，全体の29%を占めていた。また，膝関節外傷は男子

に比べて女子で約2倍であった（男子：184名，女子：404名）。膝関節に次ぎ，肩関節（272名），腰部（254名），足関節（206名）の受傷者数が多く，いずれも女子に比べて男子の数が多かった（Fig.4）。

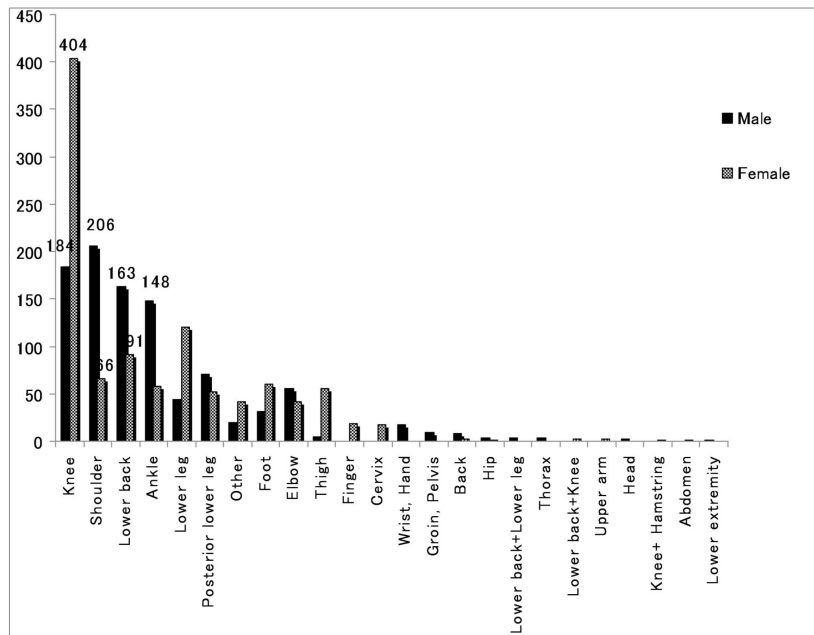


Fig.4 Distribution of injuries by body region.

#### a. 膝関節

膝関節の外傷・障害のうち，前十字靭帯再建手術後（ACL術後）のリハビリテーションおよびリコンディショニングが最も多く，膝関節外傷・障害の88%がこれに該当した（Fig.5）。

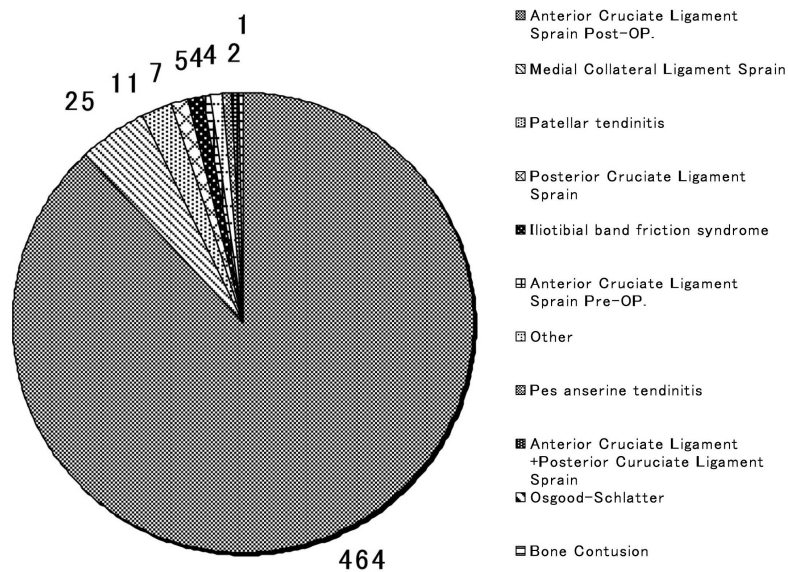


Fig.5 The annual number and types of knee injuries.

## b. 肩関節

肩関節の外傷・障害は、特定のものに偏りはなく、複合的要素を含んだものが多かった (Fig.6).

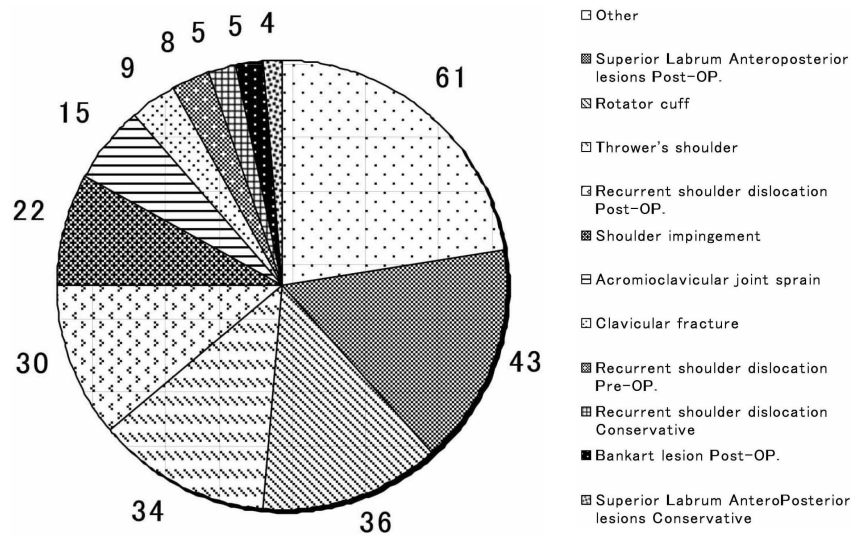


Fig.6 The annual number and types of shoulder injuries.

## c. 腰部

腰椎自体に原因がある外傷・障害（椎間板ヘルニア：43%，腰椎分離症・すべり症：15%）と、様々な原因が考えられる腰痛または筋・筋膜性腰痛の、2つのカテゴリーに受傷者が集中した (Fig.7).

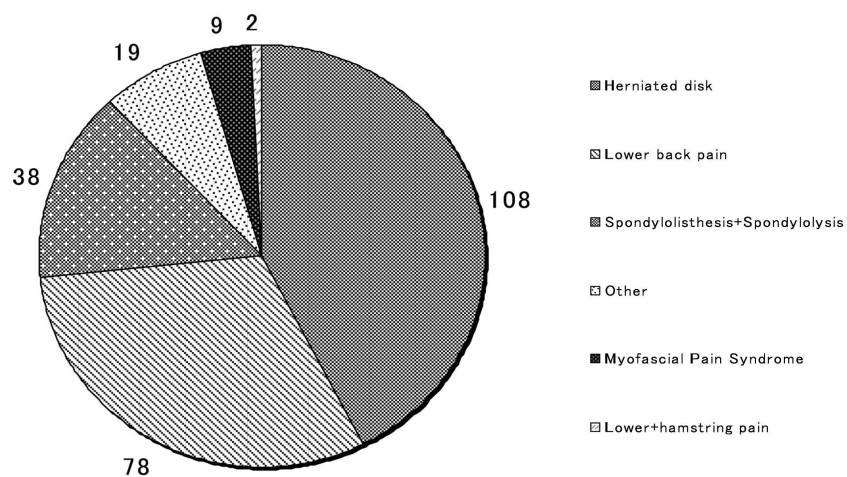


Fig.7 The annual number and types of lower back injuries.

#### d. 足関節

足関節の外傷は、一般的に捻挫と呼ばれる靭帯損傷（特に足関節外側靭帯）、および競技復帰まで6～12ヶ月のリハビリが要求されるアキレス腱断裂術後が上位を占めた（Fig.8）。

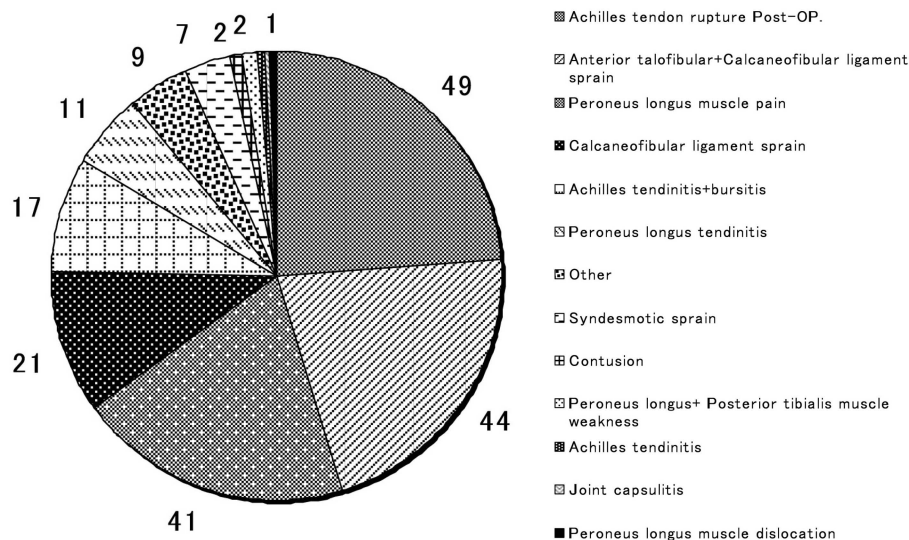


Fig.8 The annual number and types of ankle injuries.

#### 4. 部活動別特定外傷・障害発生数

特定外傷・障害数を部活動別に見ていくと、膝関節においては女子大学生の受傷者数が多かった（特に、女子バスケットボールおよび女子器械体操）。それとは対照的に、肩関節、腰部、および足関節では男子大学生の受傷者数が多かった（Fig.9）。

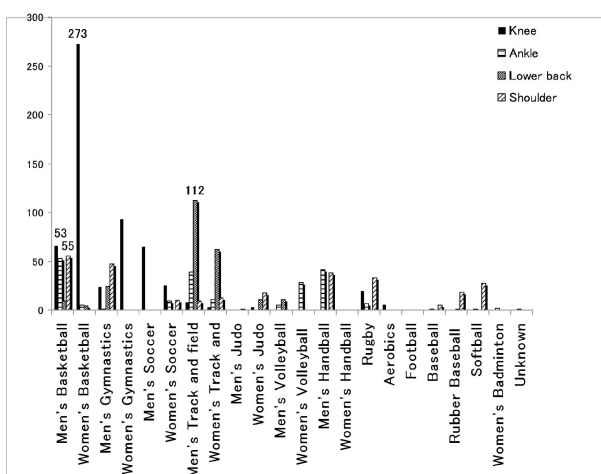


Fig.9 Distribution of particular injuries by club team.

#### 考 察

本報告では、AT教育の一環として実施しているATルーム利用大学生の記録を公開し、ATルームの延べ利用者数の内訳を、月別、部活動別、部位別、部活動による外傷・障害発生件数別および特定外傷・障害別に見ていった。今回公開した記録は、ATを志す本学学生に、組織運営と管理における記録の意義を理解してもらうことを主な目的としたものであったが、現時点でいくつかの問題点が考えられる。

まず、これまで行ってきた簡易的な利用者記録では、個々の大学生における徴候や症状、および主観的・客観的評価の詳細が不十分であった。次に、利用者記録のみではAT同士で情報を共有する機会が十分とは言えず、組織としての共通認識を持つことが難しいと思われた。さらに、正確な外傷・障害の評価を行うためには、対象大学生の既往歴など個々の履歴が不可欠であり、現在実施している記録内容ではそこまで網羅出来ていない。

これらの問題点から、本学のATルーム現場実習では、2009年9月から以下に挙げる3つの新しい試みを導入している。1つは、SOAP Noteという外傷・障害評価用紙をこれまでの記録に加えた。これは、対象者の外傷・障害を評価する際に用いる手順である、HOPS（History：問診、Observation：視診、

Palpation : 触診, Special/Stress test : 整形外科的検査)を記入する記録用紙である。このSOAP Noteは、組織としての記録の為や組織内における他のATとのコミュニケーションの為に非常に有用である<sup>2)</sup>。記入項目欄には氏名や年齢だけでなく、Subjective (既往歴, 主訴等), Objective (客観的な評価: 変形, 腫脹等), Assessment (解釈, 問題抽出), Plan (トリートメント計画)の4つがあり、AT間で個々の対象者への現状認識や今後の対策を共有することが可能である<sup>3-5)</sup>。2つ目として、長期リハビリテーションになることが予想される大学生には、プログレスノート(経過記録)を記録するようにした。プログレスノートには対象者のリハビリテーションメニューを記入し、リハビリテーション前後の対象者の様子を記入するようにした。これによって、短期・中期・長期の各期におけるゴールを効率的に設定することがより促進されるだけでなく、AT間でそれらのゴールを共有することが可能になると考えられる<sup>3-5)</sup>。3つ目の試みは、現場実習後に約1時間のスタッフミーティングを実施することであった。ミーティングでは、その日AT実習を行った学生が対象大学生の症状、状況、および気になったことを申し送りし、他のATとの情報共有を促すようにした。今後のリハビリの改善点や反省点等を互いに出し合うことで、組織としてより適切な対象者へのアプローチが可能になることが期待され、個人の技量だけでなく組織をどう導いていくかというマクロな観点からの教育的意義も有するものと考えられる。

これら3つの新たな試みを導入したことでAT間の共有情報が充実し、対象大学生の目標や到達点の明確化が期待され、結果として、AT実習を行う学生からより良いサービスの提供を引き出すことが可能になったのではないかと著者は感じている。加えて、情報の共有によって生じるAT実習学生の組織の一員としての意識から、組織の構成要因である自己への要求が積極的に高まることも期待したい。

今後の課題として、ATルームで蓄積される記録を組織内の発展だけに利用するのではなく、所属する運動部の監督やコーチなどにも適切にフィードバックし、外傷・障害の再発の防止、運動部のパフォーマンス向上に役立つ補強情報の伝達などにも活用させていく必要が挙げられる。その方法は現時点で具体化されていないが、本報告が本学における競技の現場とATの現場を結びつけるきっかけとなれば幸いである。

## 参考文献

- 1) 財団法人日本体育協会(2007):公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1アスレティックトレーナーの役割. 日本体育協会.
- 2) National Athletic Trainers' Association: National Athletic Trainers' Association. Documentation Recommendations. <<http://www.nata.org/reimbursement/ATC%20documentation.pdf>>.(2010/01/5アクセス)
- 3) Anderson M., Hall S., Martin M.(2000): Sports Injury Management 2nd Edition, Lippincott William &Wilkins, Maryland.
- 4) Starkey C., Ryan J. (2002): Evaluation of Orthopedic and Athletic Injuries 2nd Edition, F.A. Davis Company, Philadelphia.
- 5) 財団法人日本体育協会(2007):公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト5検査・測定と評価. 日本体育協会.